道で拾ったイケメン社長が極上のスパダリになりました

有允ひろみ
Hiromi Yuuin

Eternity
BUNKO

目次

道で拾ったイケメン社長が
極上のスパダリになりました　5

書き下ろし番外編
極上のスパダリは
溺愛系ハニーダーリンになりました　341

道で拾ったイケメン社長が
極上のスパダリになりました

人生、七転び八起き。

いい時もあれば悪い時もあるし、気の持ちようで自己肯定感も幸福度も上下する。

そういった意味で言えば、野元風花はポジティブでむやみに過去を引きずったりしない。常に前を向いていれば、辛かったり苦しかったりした事に囚われずにいられる。

けれど、ものには限度があるし、時折心が折れそうになる時もあった。

「はぁ……今月も赤字か……」

極寒の冬の日、風花は取引先との仕事を終えて一人帰途についていた。

風花はインテリアコーディネート会社「FUKA」の社長兼インテリアコーディネーターであり、会社は都内の下町のど真ん中にある。

比較的治安もよく住みやすい町だが、駅から自宅まで徒歩二十分と微妙に遠い。駅の反対側は開発が進んでかなり賑やかだけれど、風花の住む地域は昔ながらの風景が未だ保たれている。

時刻は午後十一時五十三分。

駅の外に出ると、朝から降り続いている雪で道路は真っ白になっていた。

「ううう……寒い……」

思わず声が出て、コートを着た肩を窄めた。天気予報では夜になったら晴れると言っていたが、雪は一向にやむ気配がない。

視界が悪い上に風もある。まさか、こんなに帰宅が遅くなるとは思わなかったし、一月下旬の寒さがこれほど厳しいなんて予想外だ。駅からまっすぐ続く商店街はすべてシャッターが下ろされており、周りには誰一人おらずシンとしている。

（レインブーツを履いてきてよかった～）

道の両側に立ち並ぶ店の軒先テントが白くなり、道路の轍も雪で隠れつつある。

風花は転ばないよう慎重に歩を進め、通りすがりにある地蔵尊に手を合わせた。ほんの少し立ち止まっていただけなのに、寒さで凍えそうになる。

自宅兼会社の事務所まで、あと五分。

商店街が終わり、雪道を照らす街灯の数が減ったせいか、辺りが薄暗くなった。治安がいいとはいえ、夜道の一人歩きは物騒だ。こんな雪の夜にうろつく不審者はいないだろうが、歩調は自然と速くなっていく。

自宅の近くには大きめの公園があり、その入り口にある時計塔を見ると、もう午前零

時二十分になっていた。

（雪道め……普段ならもう家に着いている頃なのに）

風花は心の中で文句を言いながら、公園の前を通り過ぎようとした。その時、視界の端に何か黒い塊のようなものが映り、なんの気なしに振り返る。

その物体は公園入り口の石碑に寄りかかっており、はじめは大きなゴミ袋でも落ちているのかと思った。けれど、ところどころ雪で白くなっているそれは、よく見ると人の形をしている。

「えっ!?」

びっくりして後ずさり、改めて目を凝らしてそれを見る。

やはり、間違いなく人だ！

風花は咄嗟にその人に近づき、横向きになっている顔を覗き込んだ。

「大丈夫ですか？」

明らかに大丈夫ではないその人物は男性で、ロングコートの襟元からは白いワイシャツとネクタイが覗いている。いったいどれくらいの時間ここにいたのか、髪の毛はもとより目を閉じた睫毛にもうっすらと雪が降り積もっている。

「どうされました？　生きてますか？　私の声、聞こえますか？」

話しかけながら肩をトントンと叩くと、男性の眉間に微かな皺が寄った。見たところ

怪我はしていないようだが、明らかに緊急事態だ。

「どこか痛いところはありますか？　こんなところに座ってちゃ風邪をひきますよ」

いや、風邪をひくどころか、このまま放置しておけば命を落としかねない。

少し強めに肩を揺すると、男性が低く呻いた。

微かにアルコールの匂いがしているから、おそらく酔っぱらった状態で歩いているうちにここに倒れ込んでしまったのだろう。

だんだんと風が強くなってきているし、雪に雨がまじり始めた。辺りを見回してみるも、こんな悪天候の夜に通りかかる者など誰一人いない。近くにある民家はどれも灯りが消えているし、一一〇番通報をしようにもスマートフォンのバッテリーは電車の中で切れてしまっている。

（どうしよう！）

困り果てて男性の顔を見ると、心なしかさっきよりも顔色が悪くなっている気がする。

自分が助けなければ、この人は間違いなく死んでしまう！

そう思った風花は、男性の頬を何度か軽く叩いて、今一度反応を見た。彼は眉間の縦皺をさらに深くして、風花の手をうるさそうに払う仕草をする。

「起きてください！　このままだと死んじゃいますよ！　ほら、立って！」

男性の肩を石碑から引き剥がすと、風花は彼の左腕を担ぐようにして自分の左肩の上

にのせた。
自宅まで、あと二十メートルほどだ。
とにかく今は、ここを離れて彼を自宅に避難させなければならない。身長百六十三センチの風花と比べると、男性はかなりの長身だ。風花が男性の左手をグッと引っ張ると、彼の上体がぐらりと揺れてずっしりとした重さが頭の上にのしかかってきた。
「ちょっ……しっかりしてください！　いくらなんでも私一人の力じゃ立ち上がれませんよ！」
風花は彼の頬や肩を掌で容赦なく叩きながら、繰り返し「起きて！」と声を掛けた。
「わかっ……た……」
ごく小さな声だが、男性が頷きながら反応した。
風花は叩くのをやめて、男性のコートの上から彼の腰のベルトを掴んだ。
「じゃあ、せーの、で立ち上がりますよ。いいですか？　せーのっ！」
掛け声とともに、男性がよろめきながらも腰かけていた石垣から立ち上がった。
風花は彼を背負うような格好で、一歩一歩自宅に向かって進む。ただでさえ雪道を歩くのは苦労するのに、成人男性に肩を貸してその体重を支えねばならないのだ。
男性の身長は少なくとも百八十センチ以上ある。普通なら途中でへたばってしまうところだが、日頃からインテリアを持ち運んだりしているからか、風花はこう見えて結構

な力持ちだった。
たとえ見知らぬ酔っ払いであっても、このまま見捨てるわけにはいかないし共倒れもまっぴら御免だ。
意地でも彼を自宅に避難させてみせる！
ただ一心にそう思いながら前進して、ようやく自宅兼会社に辿り着いた。建物は鉄骨造りの三階建てで、入り口と正面の壁はガラス張りになっている。
男性を入り口横の壁に寄りかからせている間に鍵を開け、彼の身体を押し込むようにして中に入った。
「まだ倒れないで！　上っ……とりあえず、そこの階段を上って！」
建物の一階は事務所、二階は物置で、最上階がプライベートスペースになっている。
とりあえず、彼を三階まで連れていかなければならない。
幸いにも男性は風花が言った事を理解してくれたようで、二人して壁をこするようにして一段ずつ階段を上り、踊り場を経てどうにか三階まで辿り着いた。
ドアを開けるなり、男性がよろめきながら部屋の入り口に倒れ込んだ。仰向けになっている男性の靴を脱がせ、うしろから両脇を抱きかかえるようにして部屋の奥に引きずっていく。
入居時に自らコーディネートして改装した部屋は、広さが二十五平米で、間取りは1

DKだ。

厚さ一・八ミリのクッションフロアは、フローリングよりも柔らかで一見本物に見える木目模様だ。部屋の奥まで進むと、床にびっしょりと濡れた道筋ができている。

撥水性があり掃除が楽な床はさておき、とにかく男性を介抱しなければ――

「ちょっと待っててくださいね。今、部屋を暖めますから」

男性を壁際のベッドに寄りかからせたあと、エアコンと電気ストーブをつける。こまめに声を掛け、様子を窺いながら大急ぎでワンピース型の部屋着に着替えた。

それからすぐに冷蔵庫からペットボトルの水を取り出し、介助しながら彼に水を飲ませる。

男性が少し咳込み、唇から水が零れた。

それを袖口で拭きながら、風花は彼の顔をじっと見つめた。

（ちょっ……この人、ものすごいイケメンじゃないの!?）

秀でた眉にスッと伸びた鼻筋。酔っているせいで口元は緩んでいるが、唇は適度に薄く綺麗な形をしている。

職業柄か、風花はフォルムの美しいものを見ると無意識に見入ってしまう癖があった。助けるのに夢中で気づかなかったが、男性の顔はびっくりするほど整っている。

男性の目蓋がピクリと痙攣し、一瞬目が開きそうになった。風花はあわてて目を逸ら

し、軽く咳払いをする。

「そ、そうだ。コート、濡れているので、とりあえず脱がせますね」

雪と雨で濡れたコートはずっしりと重く、身体から引き剥がすのに苦労した。コートと一緒にスーツのジャケットも脱げてしまい、それぞれをハンガーにかけて窓枠に引っかける。

バスルームから戻ると、男性が床の上で仰向けになっていた。

（わっ……やっぱり、大きい）

大の字になっている男性は思っていた以上に手足が長く、見たところ三十歳前後だろう。

髪の毛が多少乱れてはいるが、コートは海外の有名ブランドのものだったし、スーツの生地は上質で高級な品に違いない。身なりはきちんとしているし怪しい人ではなさそうだが、見ず知らずの若い男性という事に変わりはない。

家に連れ込んでしまったけれど、これからどうしたらいいのだろう？

「う……ん……」

男性が、ふいに苦しそうに顔を顰め、手で胸元を引っ掻くようなしぐさをする。おそらく、濡れたワイシャツが肌にくっついて首元が窮屈なのだろう。

そう思った風花は、再び彼に近づいてネクタイを緩め、首元のボタンを二つ外した。

男性が大きく深呼吸をする。胸元がゆっくりと上下し、それと同時に表情も穏やかになった。

それを見た風花は、ホッとして一息つく。

部屋は急速に温まりつつあり、もう凍え死ぬ心配はない。しかし、まだ濡れた衣類を着ている事に変わりはなく、雨を含んだ雪のせいで彼が穿いているスラックスの下半分と靴下は絞れるほど水分を含んでいる。

本当なら今すぐにでも着替えてもらいたいくらいだ。引き続き男性を見守っていると、時折微かに頭を動かすようなそぶりをしている。酩酊状態ではあるけれど多少意識はあるし、言っている事は理解してくれているようだが……

しばらくの間、部屋の中をうろうろしたあと、風花は三人掛けのソファに掛けていたブランケットで男性の胸元から膝下までを覆った。少し迷ったあと、彼の足元に跪いて濡れた靴下をそっと脱がせ始める。スラックスなど、着ているものを脱がすのは憚られるが、これくらいなら差し支えないだろう。

思っていたとおり、男性の足は冷え切っており、つま先が赤くなっている。

見かねた風花は、急いでタオルを持ってきて彼の足を丁寧に拭いた。そして、別に持ってきていたバスタオルで両脚を覆い隠す。

床から立ち上がった風花は、無意識に身震いをした。男性の面倒ばかり見ていて自分

の事は後回しになっていたが、風花だって芯から身体が冷え切っているのだ。

キッチンに向かい、電気ケトルでお湯を沸かす。マグカップに熱々のココアを淹れると、立ったままふうふう息を吹きかけてひと口飲む。

「あぁ……あったまる……」

思わず声を出して流し台に寄りかかる。飲みながら男性を見ると、彼はまだ大の字になったままだ。

風花は、今一度男性の全体像をじっくりと観察した。行き倒れの酔っ払いにもかかわらず、男性からはどこかセレブでハイソサエティな雰囲気が漂っている。

少なくとも、いきなり起き上がって襲い掛かられる心配はなさそうだ。

ココアを飲みながら壁に掛けてある鏡を見て、髪の毛がボサボサになっているのに気づいた。しかも、少々寝不足気味だからか、目の下にうっすらとクマができている。

前髪ありのミディアムヘアを掌で撫でつけながら、顔を鏡に近づけてみた。

卵型の輪郭に、ちんまりと収まった目鼻立ち。色白ではあるが、どこかひと昔前に流行った抱き人形を思わせる顔だ。

暖房が部屋の隅々にまで行き渡り、風花自身もようやく身体の芯から温まってきた。

そうなると、改めて男性が濡れた洋服を着たままなのが気になり始める。

せめて、スラックスだけでも脱がせたほうがいいのではないだろうか？

確か、クローゼットの中にビッグサイズのスウェットの上下があったはずだ。丈は足りないにしろ濡れた洋服を着ているよりはマシだろう。

いずれにせよ、彼が起きた時に着られるように準備を整えておいたほうがいい。

キッチンを離れ、なるべく音を立てないようにしながらクローゼットの中を探った。目当てのスウェットを見つけ出し、ソファの背もたれの上に置く。

男性は一向に起きる気配がないが、もう呼吸は安定しているし、いつの間にか眉間の縦皺も消えている。

（よかった。とりあえず一安心ってとこかな）

部屋の照明を消し、フロアランプを点けた。もしかすると、このまま朝まで目を覚まさないかもしれないが、幸いにも今日は土曜日で明日は休みだ。

ソファに腰を下ろし、男性を見守りながらこれからどうするか考えを巡らせる。すると、男性が突然ぶるりと身を震わせてくしゃみをした。

（やっぱり、まだ寒いのかな？）

スラックスの裾はタオルで押さえて水気を取ったけれど、膝から脛の辺りはまだじっとりと湿っている。ソファから下りると、風花は指先で男性の足首に触ってみた。案の定、足はまだ冷たいままだ。

（下だけでも脱がそう！）

風花はそう決めて、男性に掛けたブランケットを少しだけめくり上げた。腰のベルトを手探りで見つけ出し、バックルの金具とスラックスのボタンを恐る恐る外していく。

いったい自分は何をやっているのだろう？

そう考えて途中で手を止めそうになったが、やり始めたからには最後までやり通すのが風花のポリシーのひとつだ。震える手でスラックスのジッパーを下ろし、ベルトに両手をかける。そろそろと引き下ろしてみると、案外簡単に膝まで脱がせる事ができた。

（あれ？　今、ちょっとだけ腰を上げてくれたような……）

しかし、男性はまだ目を閉じたままだ。

どうにか無事スラックスを脱がし終え、彼の首から下をすっぽりとブランケットで覆った。

これでもう足が冷える事はなくなるはずだ。やれるだけはやったし、あとは濡れたコートとスラックスが乾くのを待つだけ。

こんな寒い夜はバスタブにお湯を張ってゆっくりと浸かりたい――

けれど、さすがにこんな状況で風呂に入るわけにもいかないし、疲れてはいるけれど誰とも知れない男性がいる部屋で気を抜くわけにはいかなかった。

（あ～あ……、なんでこんな事になっちゃってるのかなぁ？）

男性をチラリと見てから、キッチンに戻り飲み終えたココアのカップを洗った。

気詰まりなままここで朝を迎えるより、一階に下りて仕事をしていたほうがマシかもしれない。

そうするにしても、今の状況がわかるようなメモを書き残しておかないと、男性が起きた時に驚いてしまうだろう。

そう考えた風花は、壁際にある本棚からスケッチブックを取り出した。開いた紙面に男性がここに連れてこられた経緯を簡単に書き置いて、一階に向かう。

階段の前面は縦長の大きな窓になっており、日中は十分に日が差し込んでくる。二階まで下りて縦型のブラインドをめくり外を覗くと、いつの間にか雪はだいぶ小降りになっていた。

（朝までにはやむといいけど……）

建物の斜め前には街灯があり、辺りを薄く照らしている。前の道は狭くはないが、この時間ともなると通りすがる人など一人もいない。

一階に下りる前に少しだけ二階の片付けをしようと思い立ち、三十分ばかりそれに没頭する。

一段落してふと窓から下を見ると、車のヘッドライトがこちらに近づいてくるところだった。

そのまま通り過ぎるかと思いきや、やってきた赤い車が建物の真ん前に停まった。

（あれっ？　あの車は――）

運転席のドアが開き、やや小太りの男性が出てくる。

間違いない。

あれは先月事務所の改装に伴うインテリアコーディネートを依頼してくれた、脇本（わきもと）という中小企業の社長だ。すでに仕事は完了しているが、彼は未だ壁紙や床のタイルについて質問があると言い、やたらと会社の電話に連絡を寄越してくるのだ。

はじめはアフターフォローの一環として丁寧に対応していたが、そのうち個人的に食事に誘われたりセクハラまがいの言動を取られたりするようになった。

脇本には妻子がおり、会社には大勢の社員が働いている。なるべくなら事を荒立てたくなくて、これまでずっとやんわりとかわし続けてきた。

最近は連絡が来なくなって安心していたのに、こんな夜中に訪ねてくるなんて、いったいなんの用があるというのだろう？

車から降りた脇本が、一階の窓の外から会社の中を窺っている。

もっと近くで様子を見ようとして、風花は階段を下りて一階に続く踊り場まで進んだ。

すると、突然入り口のドアをトントンとノックする音が聞こえてくる。驚いて身がすくんだが、営業時間外だから、当然真っ暗だし入り口にも鍵がかかっているはず――

そう思った時、ハタと気がついて「あっ」と声を上げそうになった。

（入り口の鍵……閉めたっけ？）

男性を連れて帰宅した時、必死になって鍵を開けたはいいが、そのあと施錠した記憶がない。

風花は必死になって、その時の記憶を手繰った。

三階に上がった時、確かに鍵は手に持っていた。けれど、よくよく思い返してみると、男性を支えるのに必死で鍵をかけるのを忘れてしまっていた。

今ドアノブに手をかけられでもしたら――

青くなって窓辺に立ち尽くしていると、脇本がふいに上を見上げた。咄嗟に対応できず、彼とバッチリ目が合ってしまう。あわてて隠れたが、いるのはもうバレてしまっている。

こうなったら、下りて対応すべきだろうか？

けれど、こんな時間にやってくるなんて、ぜったいにおかしい。

どうしたものかと思い悩んでいるうちに、一階から電話の鳴る音が聞こえてきた。

すぐに留守番電話に切り替わり、営業時間外である事を知らせるメッセージが流れる。

ピーという発信音がしたあと、脇本が話す声が辺りに鳴り響いた。

『もしもーし、野元さ～ん。脇本で～す。いるのはわかってるし、せっかく来たんだから、ちょっとだけでも顔を見せてくれないかなぁ。「クリーム専科」のシュークリーム、好きだって言ってたよね？　お土産に買ってきたんだ。だから中入れて――あれ、ドアが開いてるぞ？』

ガチャリとドアが開く音が聞こえてきて、入り口から入ってきた冷たい外気が一気に二階にまで上がってきた。足音が建物の中に入ってきて、バタンとドアが閉まる。留守番電話が切れた音がして、辺りがシンと静まり返った。

まさか、このまま上に上がってきたりしないよね？

そう思っている矢先に、一階の廊下を歩く音とともに気味の悪い猫なで声が聞こえてきた。

「野元さ～ん。ちょっとお邪魔させてもらってもいいよねぇ？」

声が廊下の奥に移動し、足音が階段をゆっくりと上り始める。よもや、こちらの了承なしに上がってくるとは思ってもみなかった。いくら鍵が開いていたからとはいえ、これは不法侵入だ。

「ダ……ダメですっ！　もうこんな時間ですし、今は営業時間外ですから！」

風花はできるだけ声を大きくして、脇本をこれ以上来させまいとした。恐怖のせいか明らかに声が震えている。

「なんで？　一緒にシュークリームを食べるだけだし、そんなに警戒しなくてもいいよ。それとも、何か特別な事が起こるんじゃないかって期待してる？　もしそうなら、喜んで応えるけど……」

脇本がスイッチを入れたのか、階段の灯りが灯った。足音が一段一段近づいてくる。
「野元さん、俺の気持ちに気づいてたよね？　だってほら、いつも俺を見るとニコニコしてくれてたし、あれってつまり、たまにこっそりこんなふうに会って、俺ともっと親しい関係になりたいなぁって思ってるって事でいいんだよね？」
「はあ？」
勘違いも甚だしい！
しかし、今それを説明している暇はなさそうだ。
こうなったらダッシュで三階に向かい、中から鍵を掛けて締め出すしかない――
風花は急いで二階の踊り場から離れ、階段を駆け上がろうとした。しかし、五段目に足をかけた直後何かにぶつかって、うしろに倒れそうになる。
「わっ……わわ……」
咄嗟に伸びてきた腕に助けられ、そのまま横を向いた格好で脇に抱え込まれた。びっくりして顔を上げると、三階で横になっているはずの男性が風花を見下ろしている。
「え？」
わけもわからず彼の顔に見入っていると、小さな声で「しーっ」と言われた。呆気に取られているうちに、脇本が階段を上り切って踊り場までやってきた。
「風花さ～ん。何も逃げなくてもいいでしょうに――え……だ、誰だ？」

まさか男がいるとは思わなかったのか、脇本のニヤニヤ顔が一瞬にして引き攣る。男性がふっと笑い声を漏らし、風花を抱えている腕にグッと力を込めた。
「誰って、風花の恋人ですよ。見ればわかるでしょう？」
男性の胸元は大きく開いており、その下は黒いボクサーパンツのみだ。そんな乱れた格好をしているのに、彼は威風堂々としており、いかにも屈強そうだ。
彼は風花の肩をそっと撫でたあと、手を離し大股で脇本のすぐそばまで近づいていった。そして、脇本の逃げ道を塞ぐように一段下で立ち止まり、手すりに手を掛ける。
「そういうあなたは、どなたですか？」
男性が慇懃にそう訊ね、鷹揚に微笑みを浮かべた。及び腰になった脇本が、膝を震わせながら上ずった声を上げる。
「お……俺はその人と仕事で関わりがあった者で……」
「ああ、取引先の方でしたか。〝あった〟という事は、もう過去の話なんですよね。そんな方が、こんな時間になんの用です？　事と次第によっては、警察に連絡させてもらいますが」
「い……いや、その……。ちょっと近くを通りかかったもので……」
しどろもどろになっている脇本が、じりじりと後ずさる。彼は蛇に睨まれた蛙よろしく、思うように身動きが取れなくなっている様子だ。

「近くを通りかかっただけで、夜中に若い女性の家に押しかけるとは、あまりよろしくない行動ですね。見たところ既婚者のようですが、奥様はこの事をご存じなんでしょうか」

男性が脇本の左手薬指につけられた指輪を見た。そして、いかにも不愉快だといったふうに深くため息をつく。

「あなたの今後の出方次第で、こちらの対応も変わってきます。とりあえず、今のような形で風花に関わるのはやめてもらえますね？」

男性の声が壁に反響して、迫力ある雰囲気が倍増する。脇本が、たじろいだ様子でその場にへたり込みそうになった。しかし、そうなる前に男性が脇本の腕を掴んで立ったままにさせる。

「返事、聞かせてもらえますか」

スーツ姿の脇本が、ワイシャツとボクサーパンツ姿の男性に押され、びびっている。普通なら笑ってもおかしくないシュールさだ。けれど、不思議と男性の雄々しさが際立っており、気がつけば彼の気迫に圧倒されて口を開けたまま男性に見入っていた。

「は、はい。もう関わりませんっ……！」

「そうですか。では、速やかにお帰り願います。おっと、一応これはいただいておきますね。『脇本会計事務所』の脇本さん」

男性が脇本の胸ポケットから覗いていた名刺を指先で摘んだ。紙片を見る彼の顔には、

氷のように冷たい笑みが浮かんでいる。

男性が手を離すと、途端に脇本の膝が折れて尻もちをついた。彼は両方の踵を蹴るようにして男性から離れると、よろよろと立ち上がって壁の向こうに走り去る。

バタバタと階段を下りる音を追うように、男性が一階に向かう。入り口のドアが開き、再び外気が階段を駆け上がってきた。

ほどなくして車のエンジン音が響き、バタンとドアが閉まる音がした。寒さに身体を縮こまらせていると、いつの間にか男性が踊り場に戻ってきている。

一時はどうなる事かと思ったし、いろいろと危なかった。

とりあえず、助けてくれた礼を言わなければ――

そう思うものの、顎がガクガクするばかりで声が出ない。そうこうしているうちに、男性が階段に足をかけ、風花の目前まで近づいてきた。

「鍵、かけておいたよ。寒いから上に行こうか」

男性に誘導され、風花は彼とともに三階に戻った。出た時はフロアランプのみだったが、今はそれが消え天井のシーリングライトが煌々と点いている。

ソファに並んで腰かけ、ようやくホッとして脱力した。けれど、短時間にいろいろと起こりすぎて、頭がついていっていない感じだ。

「大丈夫か？」

そっと顔を覗き込まれ、ハッとして息を呑んだ。
鼻先三十センチの距離に男性の顔がある――
これほど間近に異性を感じたのは、いつ以来だろうか？
少なくとも元カレと別れて三年以上経っているし、それは別にしても、彼ほどのイケメンには生まれてこの方お目にかかった事がなかった。
「だ、大丈夫です。……あなたこそ、大丈夫ですか？」
「ああ……大丈夫だが、実はちょっと混乱してて――」
男性は風花が書いたメモ書きを読む間もなく助けに来てくれたようで、自分がどうしてここにいるのかわかっていない様子だった。
風花はメモ書きを彼に見せ、口頭でも彼を見つけてここに連れてくるまでの経緯をかい摘んで話した。
「そうだったのか。迷惑をかけて申し訳なかった。頭がぼんやりしていたし、歩いているうちに途中で座り込んでしまったんだろうな」
男性が、表情を曇らせて額にかかった前髪を指先で掻き上げる。そのしぐさがびっくりするほどセクシーで、いきなり心臓が跳ね上がった。
「危ないところを助けてくれて、本当にありがとう。何か、お礼をさせてもらわないといけないな」

男性が優しく微笑み、風花を見る目を細くする。顔のパーツも位置も完璧だし、血行のよくなった肌は色艶もよく手入れが行き届いている。
うっかり見惚れてしまいそうになり、風花はあわてて平静を装いながら首を横に振った。
「お礼なんか……私は当然の事をしたまでです。それより、さっきは助けていただいて、どうもありがとうございました！　私一人だったら、どうなっていたか……」
「いや、礼には及ばないよ。それこそ当然の事をしたまでだし。そもそも俺があんなところで行き倒れていなかったら、あの男が中に入ってくる事もなかっただろうからね。本当に悪かった」
彼が話してくれた事には、男性は風花が階下に行ってから酩酊状態から脱して、だんだんと意識がはっきりしてきたらしい。そんなところに、何か揉めている声が聞こえてきて、何事かと思い一階に続く踊り場に向かったのだ、と。
「とりあえず状況を把握しようと思ってたんだが、会話を聞いて、あいつがろくでもない男だとわかった。だから、恋人のふりをして撃退すべきだと判断したんだ」
「そうだったんですね。ご迷惑をおかけしてしまって、すみませんでした。あの、気分はどうですか？　どこか痛いところとかありませんか？」
訊ねられ、男性が自分の身体にザッと目を通した。彼の動きにつられて、うっかり同

じように男性の身体に視線を巡らせる。ただでさえ胸元が開いており、下半身は下着姿だ。
風花はたちまち頬を紅潮させて彼から目を逸らし、天井から吊り下げている星形のミラーオーナメントに視線を移した。
自分でも首から上が赤くなっているのがわかるし、もしかすると彼もそれに気づいているかもしれない。そう思うと、余計恥ずかしくなってくる。どうしたものかと考え込んでいると、ふいに上向けたままの顎を緩く掴まれ、男性のほうに引き寄せられた。
「えっ⁉」
驚いて声を上げ、一気にソファの隅まで飛びすさる。
「ん？　どうかしたか？」
風花の様子に驚いた様子の男性が、不思議そうに首を傾げた。
「ど、どうかしたかって……。あの、もしかしてですけど、今何かしようとしましたか？」
例えば、キスとか――
これほどのイケメンが、自分相手にキスなどするはずがない。そうとわかっているが、いきなり顎を掴むなんて、どう考えても普通ではなかった。
風花が眉間に縦皺を寄せて身構えていると、男性がやや戸惑ったような表情をしてふっと笑った。
「何って、ただキスをしようとしただけだが？」

事もなげにそう言われ、風花は目を剥いて口をあんぐりと開けた。
「なっ……なんでキスなんか……。どうしてそんな事――あ、あり得ないわよ！」
強い憤りを感じて、その分口調が乱れきつくなる。
助け助けられた間柄とはいえ、彼は名前も知らない赤の他人だ。そんな人と、なんの理由があってキスをする必要があるというのか――
「俺は、ただ君がキスをしてほしそうにしてたから、期待に応えようとしたまでだ」
「はあ？　わ、私、キスしてほしそうになんかしてませんけど――」
「じゃあさっき、赤くなりながら俺に向かって顔を上げたのは、なんだったんだ？」
男性が、風花を見て訝しそうな顔をする。
それは、大きな勘違いだ！
風花は口をパクパクさせながら大きく首を横に振った。
「違います！　あ、あれはあなたがそんな格好をしているから、目のやり場に困っただけで――」
「まさにそれだよ。俺がこんな格好をしているのは、君がその気だって事の表れなんじゃないのか？　つまり――」
男性が、自分の掌を自身の胸筋の上に置いた。
掌が割れた腹筋のほうに移り、そこでピタリと止まる。うっかり彼の手の動きを目で

追ってしまい、誘導されるままあやうくボクサーパンツまで行きそうになった。
「じょ、冗談でしょう？　確かに私はあなたのコートとジャケットとスラックスを脱がせたわ。でも、それはあくまでも風邪をひかせないようにするためであって、邪な気持ちなんていっさいなかった。だいたい、見ず知らずの酔っ払い相手に欲情なんかするわけないでしょ！」
　まさかの勘違いに、風花はむかっ腹を立てて鼻息を荒くする。その様子をじっと見ていた男性が、曖昧な微笑みを浮かべた。
「あっ、まだ疑ってるでしょ？　ほんっと失礼しちゃう！　言っとくけど、拾い食いするほど飢えてないから！」
　足でドンと床を踏み鳴らすと、風花は肩で息をしながら男性を睨みつけた。
　ようやく自分が誤解していたと納得したのか、彼がすまなそうに眉尻を下げる。
「そうか……それは重ね重ね申し訳なかった。完全に俺の勘違いだ。本当にすまない」
　素直に謝って頭を下げられ、拍子抜けする。謝罪は迅速かつ丁寧だし、そんなふうにされたらこれ以上怒れなくなってしまう。
　本当なら、今すぐにでも追い出してやりたい。しかし、まだ洋服は乾いていないし、行き倒れていた人を再び寒空に追いやるのはためらわれた。
「わかってくれたのなら、いいけど……」

　怒りの矛を収めると、風花はソファの背もたれに置いていたスウェットの上下を手にした。
「はい。よかったらこれに着替えて。ゆったりサイズだから、着れなくはないと思うから」
　風花がスウェットを手渡すと、男性がキョトンとした表情を浮かべる。
「泊めてくれるのか？」
「だって、仕方ないでしょ。一応あんな場所で行き倒れていたわけだし、追い出して何かあったら困るもの。もうこんな時間だし、外は極寒だし。それに、セクハラ社長から助けてくれた恩もあるから」
「それは、ありがたいな」
「言っとくけど、別にそれ以上でも以下でもないから！　今夜はここに泊めてあげる――ただ、それだけ。だから、名前とか教えてくれなくてもいいわ。私のほうは住所とか名前とか思いっきりバレてるけど、これ以上は詮索しないで」
　脇本にフルネームを呼ばれたし、ここが会社の事務所兼自宅なのもわかってしまっているだろう。
　それは致し方ないが、これ以上お互いの素性を知っても何にもならない。
「わかった。じゃあ、さっそく着替えさせてもらうよ」
　男性が立ち上がり、シャツを脱いでボクサーパンツだけの格好になる。

風花はあわてて目を逸らし、男性とは別方向に立ち上がった。
「何か温かいものでも、飲む？　コーヒーか紅茶、あとココアと日本茶と……一応お抹茶とハーブティーもあるけど。あ、コーヒーならノンカフェインのもあるわ」
「ありがとう。じゃあ、ノンカフェインのコーヒーをもらおうかな」
風花は頷き、男性から目を背けたままキッチンに向かった。再び電気ケトルでお湯を沸かし、二人分のコーヒーを淹れる。
「本当に、どこか痛いところとかない？　あと、なくなっているものとかは？」
「どこも痛いところはないな。バッグは持ってなかったし、財布は――」
着替えを済ませた男性が窓際に近寄り、スーツの内ポケットを探る。思ったとおりスウェットの丈はぜんぜん足りていない。けれど、ゆとりある作りのおかげで、着られないほど窮屈ではなさそうだ。
「あった。特になくなっているものはないな」
「そう。よかったわ」
コーヒーを淹れ終えると、男性がキッチンに来てカップを載せたトレイを持って、ソファの前にあるテーブルの上に置いてくれた。正方形のそれはラタン製で、もとはスツールとして売られていたものだから作りがしっかりしている。
「ありがとう」

風花は礼を言ってソファに腰かけ、男性に隣に座るよう促した。
「こちらこそ、いろいろとありがとう」
男性が風花の隣に座り、カップを手に取る。彼の指は長く、少しゴツゴツしているけれど造形が綺麗だ。口元にカップを近づけて、中に息を吹きかける様子は、まるでコーヒーのコマーシャルフィルムのように様になっている。
またしても見惚れそうになり、風花は急いで視線を自分の手元に移動させた。
「どういたしまして」
いろいろと面倒をかけられたし、とんでもない誤解をされたけれど、男性は礼儀正しいし、信用できる人物であるような気がする。
何はともあれ、危ないところを助けてくれたし、悪い人ではないのは確かだ。
風花はそんな事を思いながら、男性と二人で黙ったままコーヒーを啜った。
「あぁ……美味しい。おかげで芯から温まったよ」
コーヒーを半分ほど飲み干すと、男性がソファの背もたれに上体を預けた。
「それはよかったわ。……ところで、どうしてこんな雪の夜に、あんなところに座り込んでたの？」
風花が訊ねると、男性は首をひねりながら、少しの間考え込む。
「今日は取引先が主催するイベントがあって、そのアフターパーティが始まったのが午

後十一時だったんだが――」

男性が言うには、彼は体質的にお酒を受け付けず、日頃アルコールを口にする事はないらしい。

当然会場でも一滴も飲んでいなかったのに、途中で飲酒をした時のように頭がぼんやりとし始め、急遽会場を出て一人で帰宅すべくタクシーに乗り込んだようだ。

「タクシーに乗ってからの事は、正直あまり覚えてないんだ。運転手に行き先はちゃんと告げたつもりだったが、もしかしてろれつが回っていなくて聞き間違いをされたのかもしれない」

さらに話を聞くと、イベントを主催した会社はアルコールを扱う企業だったようで、会場には当たり前のようにお酒が置かれていたらしい。

「もしかして、間違って飲んでしまったのかもしれないが……。その辺りは、記憶が曖昧でよくわからない」

「そうだったの……。いずれにせよ、飲めないのにお酒の席に出るのって、辛いわよね。私も、お酒は得意じゃないから気持ちはよくわかるわ」

風花は、まったく飲めないわけではないが、酔うとすぐに頭がぼんやりする。そのため、基本的に外では飲酒しないようにしていた。

「仕事をしていると、流れで食事に行ったりする事ってあるでしょ。その時、軽くお酒

でも――ってなるたびに、断って気まずくなるのが申し訳なくて。そのせいで場が白けて、結局それ以降仕事をもらえなくなった事もあったわ」

「君の気持ちは、俺もよくわかるよ。だけど、酒が飲める飲めないは体質だからどうしようもないし、それが理由でなくなる仕事なんて遅かれ早かれ切れてしまうだろうな」

「私も、そう思う。でも、うちは今そんなに余裕があるわけじゃないし、なんでもいいから仕事が欲しいって状況なの。新規の仕事が欲しいけど、なかなか依頼が来ない。昔取引があった縁で仕事を得られても、馴染みが深ければ深いほど料金を安くしたり、いろいろオマケする事になったりして」

風花は、自分でも気づかないうちに男性に仕事上の悩みを打ち明けていた。

今日知り合ったばかりの人に、どうして――

そう思いつつも、なぜか一度話し始めたら止まらなくなってしまった。

「ごめん、普段言えないような愚痴を、見ず知らずの人に話すなんて変よね」

風花が苦笑すると、男性がカップをテーブルに置いて身体ごと風花に向き直った。

「いや、見ず知らずの相手だからこそ言えるんじゃないか？　恩返しにもならないけど、俺でよかったら愚痴でもなんでも言ってくれていいよ」

「ほんと？　……じゃあ、聞いてもらおうかな」

詳細は明かさなくても、愚痴は吐ける。

男性の言葉に後押しされて、風花はためらいつつも今日完了したばかりの仕事の件を話し始める。

それは東京郊外にある昔ながらの喫茶店の改装で、着工から完工までおよそ一カ月かかった。

依頼主は昔から付き合いがある人の親戚にあたる若年夫婦で、家業を継ぐにあたり店舗をリフォームする事にしたのだそうだ。

コーディネート料金は、規模や提案内容の合計によって多少違ってくるものの、だいたいの金額は決まっている。そのほかに打ち合わせにかかる時間や交通費、諸々(もろもろ)の事務手数料などもあるけれど、紹介という事もあり諸費用込みで、かなり格安料金で済ませた。

「全体の何パーセントくらい値引いたんだ？」

「だいたい十パーセントくらいかな」

「もともとの価格設定がどうなっているのかは知らないが、それは値引きしすぎじゃないか？」

「やっぱりそう思う？　だけど、紹介してもらう時に『ご両親とは長く懇意にさせてもらっていたのよ』とか言われちゃったし『知り合い価格でお願いします』なんて手を合わせられたら、断り切れなくって」

「ふむ……仕事はご両親から引き継いだもののようだが、そこはきっちり線引きをして

おかないとダメだ」

「だよね……。わかってる。わかってるんだけど、つい……」

風花は幼い頃に両親を亡くしており、西日本の田舎(いなか)に住む母方の祖父母に育てられた。亡き両親はかつてこの場所でインテリアショップを営んでおり、父母の死後は父方の叔母が引き継いでくれていた。

両親の記憶がほとんどないまま育った風花だったが、誰に言われるでもなくインテリアに興味を持つようになり、高校卒業後は地元の大学で環境デザインを学んだ。その後上京して都内のインテリア会社に就職。それから三年のちに叔母が結婚して海外に移住する事になり、それを機にここを引き継いでインテリアコーディネート会社「ＦＵＫＡ」をオープンさせた。

しかし、現実は甘くない。

それなりに広告を出して宣伝をしたけれど、入ってくる仕事のほとんどが両親や叔母の縁があってのもので、規模も小さなものばかり。それだけにクライアントの要望重視で、あまり思い切ったコーディネートはできず、金額もできる限り抑えたものになりがちだ。

この物件は、もとは賃貸だったのを叔母が仕事を引き継いだ時点で買い上げ、現在は彼女の厚意で格安の賃料で貸してもらっている。ゆくゆくは稼いだお金でここを買い取りたいと思っているが、今の状態では普通に生活する事さえ難しい状態だった。

「それでやっていけてるのか？」
「ううん。やっていけてないから、仕事がない時は友達のやっている派遣会社から短期の仕事を紹介してもらってるの」
「なるほど……。今の話だと、来る仕事はほぼ昔の顧客からの依頼か、そこからの紹介のようだな。つまり、仕事のほとんどは十パーセント引きで請け負っているという事か？」
「まあ、だいたいそんな感じ」
「派遣先では、どんな仕事をしているんだ？」
「なるべく本業と関連のある仕事先を紹介してもらってるんだけど、結局は事務か雑用が多いかな。せっかくだからいろいろと学びたいんだけど、そう上手くはいかなくて」
風花が答えると、男性が渋い顔をする。
「問題が山積みだな。とにかく、本業に関しては今の仕事の仕方はやめないと、しまいには会社を畳む事になるぞ」
情に訴えられてオマケすると、次に依頼してくれてもまた同じ待遇を求められる。そこから紹介された仕事をするにしても同じだ。男性の指摘に、風花はひと言も反論できなかった。
「仕事をする上で、君はもっとシビアになったほうがいい。ここを買い取れるほどの利益を出したいと思うなら、そうすべきだ」

自分の甘さを指摘されて、耳が痛い。けれど、第三者からの意見は貴重だし、ありがたかった。
「君は自分の仕事に誇りを持っていないのか？」
「もちろん、誇りは持っているわ。引き受けた仕事はすべて全力で取り組んでいるし、クライアントからの要望は、すべてクリアしてるつもりよ」
「だったら、なおさら言われたとおりの値引きなんかすべきじゃない」
見た目や話しぶりからして彼はきっと優秀なビジネスパーソンに違いない。そう思うと、彼ともっと話をしたい気持ちがムクムクと湧き上がってきた。
「私、強く出られると、つい引いてしまうの。値引き以前に、もっとコストを下げたいってお願いされると、依頼に基づいたイメージが壊れるのを承知で受け入れてしまって。それで、やっぱり微妙に違う感じになって、結局は納得がいかなくて自腹を切る事になって――」
ここに来るクライアントは資金が潤沢（じゅんたく）にある人はおらず、少しでも安価に仕上げたいと望んでいる。その気持ちはわかるが、望みが高ければ高いほど相応のコストがかかるのは当前だった。
そのすり合わせをするのも仕事のうちだが、風花自身にも譲れない部分があり、結局足が出た部分を自分で負担したり値引いたりする事になるのだ。

「なるほどな。君は押しに弱く、要領が悪い傾向にある。だから、さっきみたいな男に勘違いされてつけ込まれたり、コストに見合った仕事をすれば済むところを、どうしても妥協できず自腹を切ったりする」

「ぐうの音も出ないわ」

風花は自虐的に笑い、ため息をつきながらソファの背もたれに身を預けた。

「それにお人好しすぎる。私生活でならそれでいいだろうが、ビジネスでそれをすべきじゃない」

ズバリと指摘され、風花は男性の顔をまじまじと眺めながら大きく頷いた。

「本当にそうだわ。あなたって、すごいのね。すべてお見通しって感じ」

こうして第三者と話していると、自身の考え方や現状がよくわかる。

きっと男性には、風花が理想を追い求める甘ちゃんに見えているのだろう。

そして、風花自身もちゃんとそれに気づいているのだ。

「もっとバリバリ仕事ができるようになりたいな。せめて派遣の仕事なしでも生活できるようにならなきゃ。でも、今の仕事量だと金銭的にも厳しいのよね……」

せめて、紹介された派遣先でインテリアコーディネーターとして職務経歴に書けるような実績を積みたい。そう思うものの、現実はそう上手くいかず、身についたのはデータ入力やファイリングなどの事務能力ばかりだ。当然、本業に関わる経験はほとんど増

えておらず、ただ生活費を稼ぐだけの副業になってしまっている。

「あ〜あ、辛いっ！　でも、頑張らなきゃいけないし、ぜったいに諦めたくないの。だけど仕事はないし、あっても利益は生活費と家賃にぜんぶ消えちゃって、この頃じゃ好きなインテリアショップ巡りをしても見るだけでひとつも買えないんだよね」

「へえ、君はインテリアショップ巡りが好きなのか」

男性に問われ、風花はようやく自分が少し喋りすぎた事に気づいた。

けれど、名前とここの住所を知られている以上、もう変にボカして話す意味はない。

それに、調べたらすぐにこちらの職業がなんなのかわかってしまう。

話す内容からして彼はどうやらそれなりの地位について余裕ある生活を送っている人のようだし、ビジネスパーソンとして優秀である事は間違いない。

どうせここまで話したのだから、もっと突っ込んだ話をしたり聞いたりしてみたくなった。

「実は私、インテリア関係の仕事をしてるの。この部屋も自分でコーディネートしたし、シーズンごとに模様替えもしてるのよ。あそこにある棚はよく行くアンティークショップで買ったもので、上に載ってるのは蚤の市に通ってゲットした小物達なの」

「なるほど。手をかけて作り上げた部屋だから、こんなに居心地がいいんだな」

たとえお世辞であろうと、そんなふうに言われて嬉しくないはずがない。

好きなものの話は尽きないし、男性は時折相槌を打って興味深そうに聞いてくれる。
気持ちよくペラペラと喋り続け、気がつけば一時間近く経っていた。
「ごめん。私ばっかり喋っちゃって……」
「構わないよ。興味深いし、君の話はとても面白い」
どこの誰とも知れない人だが、話してみて彼が心根の優しい人である事は伝わってきた。
「そうだ。お腹空いてない？　私、今日は仕事で遅くなっちゃって晩ご飯食べ損ねてるの」
ソファから立ち上がり、キッチンに向かう。すると、空のコーヒーカップを載せたトレイを持った男性が、風花のあとを追ってきた。
「何を作るんだ？　よかったら手伝おうか？」
「ううん、大丈夫。作るって言っても、今できるのはうどんくらいだから」
礼を言ってトレイを受け取ると、風花は男性の申し出を辞退した。話が弾んで気が緩んだのか、彼に対する警戒心が薄らいでいるのを感じる。
「寝る前だけど、一緒にどう？」
「ああ、喜んでいただくよ」
「わかった。じゃあ、二人分作るね」
気軽な感じで会話をしたあと、ふと思いついてコップを洗う手が止まる。

（そうだ……私、今夜この人を泊めるんだよね）
遅ればせながら今の状況に気づき、風花は密かにあわて始める。
外は大雪で泊める理由はあるし、言い出したのは自分だ。ほんの数時間だが、一緒にいて彼が常識のあるビジネスパーソンである事はわかった。しかし、勘違いにせよキスをされそうになったのも事実であり、泊めるにしてもなんの対策も講じずに寝てしまうのはさすがに不用心すぎるだろう。
少なくとも、自分だけは朝まで起きているべきだ。
そんな事を考えつつ冷蔵庫から冷凍のうどんを出し、鍋に水を入れる。
ほぼ毎日キッチンに立つけれど、料理が得意と言えるほどの腕ではない。今作ろうとしているうどんだって、スープは専用の粉末だしを使って作るつもりだ。
あんな高そうな洋服を着ているのだから、普段食べるものも相応に高級なものなのでは？
そんな人に自分が普段食べている手抜き料理を出してもいいものだろうか。
風花は美味しいと思って食べているが、果たして彼の口に合うかどうか……
考え込んでいるうちに鍋の中でうどんがグツグツと煮え始め、風花はそこに粉末だしと、あらかじめ切って冷凍しておいたネギを入れた。
（ええい、もう作ってしまったんだから出すしかないっ！）

どうせ、すぐに食べられるものはこれくらいしかないのだし、こんな寒い夜は温かいだけでもご馳走だと割り切る。用意したどんぶりに麺を移し、スープを取り分けた。そこに卵を割り入れて、天かすを振りかける。

「おまちどうさま。こんなものしかなくて悪いけど」

運んできたトレイには、冷たい麦茶のほかにすりごまと七味も載せてある。

「ありがとう。実は俺も、かなり腹ペコだったみたいだ」

男性が笑い、用意した割り箸を割る。テーブルはさほど大きくないから、トレイを挟んでどんぶりを二個置くだけでいっぱいになってしまう。

向かい合わせになった男性との距離は、手を伸ばせば顔に指先が届く近さだ。なんでもないふうに話しているけれど内心ドキドキで、さっきキスをされそうになった時くらい動揺していた。

そうなると、今まで気にならなかった男性の一挙手一投足が、いちいち目に留まる。

「いただきます」と言って手を合わせた時の指先や、箸を持つ手の甲に浮かぶ太い血管。サラサラした黒髪に、首の真ん中で膨らんでいる喉仏などなど……

見れば見るほど彼のパーツの美しさに目を奪われてしまう。

「美味い……！　このうどん、すごくコシがあるな。スープもすっきりとした甘みがあって、胃袋に染みるよ」

男性が唸りながらうどんを食べ、スープを飲む。

まさかこんなに喜んでもらえるとは思わず、風花は自分でも気づかないうちに頬を綻ばせていた。

「よかった。この冷凍うどん、私のお気に入りなの。いつも冷凍庫に入ってるし、なくなりそうになると必ず補充してるくらい」

「冷凍うどんか。今、これを作るのにそんなに時間がかかってなかったよな？」

「だいたい五、六分くらい？　麺をゆでて、そこに粉末のスープを入れるだけだもの。あとはお好みでトッピングを入れればいいし」

「だったら、俺でも作れるかな」

「作れるわよ。もしかして、普段あまり料理はしないほう？」

「そうだな。気が向けば朝食くらいは作るが、それもほんのたまにだ。だいたいいつも外食かテイクアウトだな」

「ふぅん」

毎日そんな食事をしているなんて、彼はかなりゆとりある生活をしているのだと感心する。

もしかすると、自分で会社を経営しているのかもしれない。いずれにせよ、自分と彼とでは生活レベルにかなりの差がありそうだ。

風花が毎日自炊をしているのは、何よりそれが一番安いからだ。余裕さえあれば週に一度は外食したいし、スーパーマーケットやコンビニで値段を気にせずに買い物をしたい。

早く贅沢ができるくらいになりたいが、きっとそうなっても、この冷凍うどんは自分のお気に入りであり続けるだろう。

そんな事を思いながら、ふと前を見た。

男性は箸を綺麗に持って、うどんを食べている。下を向いた目蓋の曲線や頬骨の高さが完璧だ。身体が温まってきたのか、額にうっすらと汗が滲んでいる。それを気にする事なく、ふうふうと息を吹きかけながらうどんを啜る口元に見惚れた。

もし、あのままキスを許していたら――

ついそんな事を思ってしまい、自分のさもしさに呆れ返る。いくら相手が稀に見るイケメンでも、出会ったばかりの相手にそんな感情を抱くなんて、我ながら情けない。

これ以上邪な考えを持たないように、男性から視線を逸らしてうどんを食べる事に集中する。

「うーん、黄身を麺に絡めて食べると、また格別だな。スープを吸った天かすの甘みもいい」

「でしょう？　やっぱりうどんにはこれがないと。あと、お菓子ののり天を載せても美味しいんだよね」

「お菓子ののり天？」

男性が顔を上げて風花を見る。突然まっすぐに見つめられて、思わず頬が引き攣ってしまった。

「し、知らない？　スーパーのおつまみコーナーとかによく置いてあるやつ。ちょっとカロリーが高いんだけど、スープでカリカリののり天が柔らかくなったのを麺に絡めて食べると、すっごく美味しいんだよね」

言ってしまってから、ハッとして口を噤む。普段冷凍うどんなど食べないようなエリートに向かって、スーパーのおつまみコーナーの話をしてしまうとは……

風花は自分の庶民的すぎる発言を後悔しつつ、どんぶりの中身だけに視線を置いて一心にうどんを食べ進めた。

「美味かった……。こんなに美味しいうどんは、はじめて食べたよ」

先に食べ終えた男性が、箸を置いて満足そうな声を上げる。

「大袈裟ね。普段から外食してるなら、美味しいうどん屋さんだって知ってるでしょ」

「確かに知ってるが、これは別物というか別格だ」

そう言う男性の顔は、間違いなく名店の味を知り尽くしているように見える。けれど、今食べているうどんを本気で「美味い」と言ってくれているのが伝わってきた。

「これは、癖になる味だ。中毒性があるというか、とにかく美味しかったよ」
「ごちそうさま」と言って手を合わせるしぐさが、とても美しい。
育ちのよさが表れているし、生まれながらに持っている品のようなものを感じる。その上、圧倒的なオーラがあり、油断していると彼の一挙手一投足に視線を奪われて目が離せなくなってしまう。
風花に言わせれば、癖になる中毒性があるのは彼のほうだ。
風花が心底感心していると、男性が空になったどんぶりをトレイに載せて立ち上がった。
「あ。私が運ぶよ」
「いや、作ってもらったんだから、これくらいはやらせてくれ」
腰を浮かせる風花を笑顔で押し留めると、男性がトレイを持ってキッチンに歩いていく。
風花はソファに腰を下ろすと、背を向ける彼のうしろ姿に視線を置く。
改めて見ると、スウェットは上下とも寸法が足りておらず、裾はふくらはぎの途中までしかない。
それなのに、妙に着こなしている感があり、なんなら似合っていると言ってもいいくらいだ。さすがにひいき目が過ぎると思うものの、そう思ってしまうのだから仕方がない。

流し台の前に立つ男性は、背が高く腰を曲げるようにして洗い物をしている。きっと慣れていないのだろう。どんぶりを洗うだけなのに今ひとつ手際が悪く、見ているだけでハラハラする。
しかし、一生懸命丁寧にやろうとしてくれているのはわかるし、その様子がなんだか微笑ましくて、いつの間にかまた男性に見入っていた。
思えば、彼氏でもない男性と夜をともにするのは、はじめてだ。もっとソワソワしてもいいはずなのに、なぜか彼がここにいてくれるだけで安心する。勘違いで唇を奪われそうになったけれど、セクハラ社長を撃退してくれた功績に比べたら騒ぐような事でもなかったかもしれない。
男性を眺めながらつらつらと考え事をしていると、立て続けに欠伸（あくび）が出た。まだ彼を寝かせる場所を決めていないし、準備もできていない。
皿を洗い終えてこちらに戻ってきたら、その相談をしなければ――
そう思いながら待ち構えているのに、男性はなかなか帰ってこない。何度目かの欠伸が出たあと、ふいに目蓋が重くなる。うっかりうとうとしてしまいハッとして目を開けると、いつの間にか男性の顔が目の前に迫っていた。
「わっ……びっくりした！」
「だいぶ疲れているみたいだな。もう寝たらどうだ？」

「わ、私はいいから、あなたこそ寝てちょうだい。ほら、あそこのベッドを使って。外国製だから割とゆとりがあるし」

それは都内のアウトレットショップで買ったもので、横幅が百三十五センチある。

風花が窓際に置かれたベッドを示すと、男性が緩く首を横に振った。

「それはできない」

「どうして？　あ、お風呂？　シャワーだけならすぐにでも貸せるけど――」

「そうじゃなくて、ベッドは君が使うべきだ。遅くまで仕事をして、その上なんだかんだあって疲れてるだろうし」

「私なら大丈夫。たまにラグの上で寝ちゃう事もあるし、ここで平気だから。寒空の下で凍死しかけてたんだし、今夜はあったかくして寝なきゃダメよ。それに、まだちょっとやる事があるから、遠慮せずに寝てちょうだい」

話しているうちに、だんだん表情が強張り目が泳ぎ始めた。

距離が近すぎる！

風花は、それとなく横にズレて男性から離れた。

「ああ、もしかして寝ている間に俺に襲われるかもしれないって思ってるのか？　それなら心配いらないよ――と言っても、信じてもらえないかな」

そう言って、男性が意味ありげに風花の口元を見た。その視線を感じて、唇に緊張が走る。

勘違いした上に、自意識過剰な女だと思われたくない！

風花は、あわてて口元に笑みを浮かべた。

「お、襲われるとか、ぜんぜん心配してないわよ。あの時は状況的に誤解されても仕方がない感じだったし、もういろいろと話したりして、あなたが信用できる人だってわかったから」

「そうか。だが、さすがにベッドを使うのは彼氏に悪いだろう？　もし下の階を使わせてもらえるなら、俺はそこでもまったく構わないし――」

「その点なら心配いらないわ。私、彼氏いないもの」

「でも、好きな人はいるんじゃないのか？」

「残念ながら、そういう人もいないわ。というか、いろいろあってもう恋愛はいいかなって思ってるから」

「それはまた、どうして？」

話の流れで、風花はこれまでの恋愛についてポツポツと話し始める。

風花が過去付き合った男性は、三人いた。一人は同じ大学の先輩だったが、彼の事を好きになった友達に略奪されて破局。社会人になってからできた彼氏は、向こうから付き合おうと言ってきたのに別の女性から告白された結果、風花を捨ててその人を選んだ。

立ち読みサンプル
はここまで